

平成 21 年 5 月 22 日現在

研究種目：基盤研究(C)  
 研究期間：2006～2008  
 課題番号：18520353  
 研究課題名(和文) 文献に現れた語彙・語法と国語史の不整合性について  
 研究課題名(英文) Vocabulary and grammar in the literature and the inconsistency with the history of Japanese.

研究代表者  
 蜂矢 真郷(HACHIYA MASATO)  
 大阪大学・文学研究科・教授  
 研究者番号：20156350

## 研究成果の概要：

近世・近代の文語文を中心に、「口語性」と不連続・不整合を見せる語彙・語法をとり挙げて検討する。

## 交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	1,500,000	0	1,500,000
2007年度	900,000	270,000	1,170,000
2008年度	1,100,000	330,000	1,430,000
年度			
年度			
総計	3,500,000	600,000	4,100,000

## 研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・日本語学

キーワード：文献、語彙・語法、国語史、不整合性、近世・近代、文語文、擬古的表現

## 1. 研究開始当初の背景

従来の国語史研究は、「口語性」を反映していると言われる文献を特に重視して行われてきた。また、必ずしも口語的ではない文献からも、「口語性」が露呈していると言われる部分を言わば恣意的に取り出して利用するということが行われてきた。こうした姿勢には問題があると考えられる。

## 2. 研究の目的

本研究は、「口語性」を重視する従来の観点を裏返し、「口語性」と不連続・不整合を見せる語彙ないし形態を積極的に取り上げ、これまで切り捨てられてきた資料に光を当

てることによって、国語のより豊かな実態を明らかにしようとする。

## 3. 研究の方法

前回2003-2004年度「文献に現れた述語形式と国語史の不整合性について」に引き続き、「口語性」と不連続・不整合を見せる語彙ないし形態を積極的に取り上げる。具体的には、近世・近代の文語文における語彙・語法を中心として取り上げる。前回は、述語形式に限って検討してきたが、本研究では対象とする範囲を広げて行く。

#### 4. 研究成果

擬古文が目指すのは主に中古であると言われるが、中古より上代を目指した擬古的表現もかなりあることが明らかになった。口語との接触、その他の理由により、変形を受けることもあるなど、いろいろな語彙・語法のあり方についても検討することができた。理論的な面を含めて、そこから広がる問題についても取り上げることができた。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 19 件)

- ① 蜂矢真郷『新編左千夫歌集』の形容詞、『国語語彙史の研究』28、pp. 101-pp. 118、2009年、国語語彙史研究会、査読有
- ② 蜂矢真郷「テ[手]とその周辺」、『待兼山論叢』42、pp. 1-pp. 21、2008年、大阪大学文学会、査読無
- ③ 蜂矢真郷「語の変容と類推—語形成における変形について—」、『国語語彙史の研究』27、pp. 273-pp. 284、2008年、国語語彙史研究会(飯倉洋一氏編『テキストの生成と変容』、pp. 174(33)-pp. 164(43)、2008年、2005-2007年度大阪大学大学院文学研究科広域文化表現論講座共同研究研究成果報告書)、査読無
- ④ 蜂矢真郷「現代仮名遣いの長音表記」、『国語文字史の研究』10、pp. 283-pp. 296、2007年、国語文字史研究会、査読有
- ⑤ 蜂矢真郷「ト[門]とト[戸]とト[外]」、『京都語文』14、pp. 4-pp. 19、2007年、佛教大学国語国文学会、査読無
- ⑥ 蜂矢真郷「ヲ[小]とコ[小]」、『國學院雑誌』108-11、pp. 38-pp. 50、2007年、國學院大學、査読無
- ⑦ 蜂矢真郷「上代特殊仮名遣に関わる語彙」、『萬葉』198、pp. 1-pp. 36、2007年、萬葉学会、査読有
- ⑧ 蜂矢真郷『日本唱歌集』の形容詞、『国語語彙史の研究』26、pp. 273-pp. 284、2007年、国語語彙史研究会、査読有
- ⑨ 蜂矢真郷「ト[利]をめぐる語群」、『親和国文』41、pp. 141-pp. 158、2006年、神戸親和女子大学国語国文学会、査読無
- ⑩ 蜂矢真郷「タテ[縦]・ヨコ[横]とその周辺」、『語文』86、pp. 9-pp. 20、2006年、大阪大学国語国文学会、査読無
- ⑪ 蜂矢真郷「促音・撥音の現代ローマ字表記」、『国語文字史の研究』9、pp. 221-pp. 236、2006年、国語文字史研究会、査読有
- ⑫ 金水敏「翻訳における制約と創造性—役割語の観点から—」、飯倉洋一氏編『テキストの生成と変容』、pp. 61-pp. 66、2008年、2005-2007年度大阪大学大学院文学研究科広域文化表現論講座共同研究研究成果報告書、査読無
- ⑬ 金水敏「言と文の日本語史」、『文学』8-6(11月号)、pp. 2-pp. 13、2007年、岩波書店、査読無
- ⑭ 金水敏「日本(語)への発信・日本(語)からの発信(シンポジウム「歴史語用論:その可能性と課題」)」、『語用論研究』8、pp. 67-pp. 68、2006年、日本語用論学会、査読無
- ⑮ 金水敏「「~でいる」について」、益岡隆史・野田尚史・森山卓郎(編)『日本語文法の新地平 1形態・叙述内容編』、pp.

143-p p. 156、2006年、くろしお出版、査読無

- ⑫ 金水敏「日本語アスペクトの歴史的研究」、『日本語文法』6-2、p p. 33-p p. 44、2006年、日本語文法学会、査読有

- ⑬ 金水敏「古代・中世日本語用例のローマ字表記について」、『文法と音声』V、p p. 177-p p. 190、2006年、音声文法研究会、査読無

- ⑭ 金水敏「言語コミュニティと文体・スピーチスタイル」、伊井春樹(監修)加藤昌嘉(編集)『源氏物語のことばと表現』講座源氏物語研究8、p p. 9-p p. 29、2007年、おうふう、査読無

- ⑮ 岡島昭浩「〈五音歌〉の変容-外郎売りと姓名判断-」、飯倉洋一氏編『テキストの生成と変容』、p p. 136(71)-128(79)、2008年、2005-2007年度大阪大学大学院文学研究科広域文化表現論講座共同研究研究成果報告書、査読無

[学会発表] (計5件)

- ① 蜂矢真郷「二音節語基と形容詞語幹」、国語語彙史研究会第90回、龍谷大学大宮学舎、2008年12月6日
- ② 蜂矢真郷「語の変容と類推-語形成における変形について-」、大阪大学大学院文学研究科広域文化表現論講座 2005-2007年度共同研究「テキストの生成と変容」(代表者飯倉洋一氏)第14回研究会、大阪大学、2007年7月19日
- ③ 蜂矢真郷「ト[門]とト[戸]とト[外]」、佛教大学国語国文学会第11回大会・講演、佛教大学、2006年11月25日
- ④ 蜂矢真郷「上代特殊仮名遣いに関わる語彙」、萬葉学会第59回全国大会・講演会、日本女子大学、2006年10月28日

- ⑤ 金水敏「現代に生きる古典日本語(招待パネル“Classical Japanese”Chair:Haruo Shirane)」、2006日本語教育国際研究大会、The Association of Teachers of Japanese/National Council of Language Teachers、コロンビア大学、ニューヨーク市、2006年8月5日

[その他] (計1件)

- ① 岡島昭浩「『積ん読』の語誌」、南陀楼綾繁+積ん読フレンズ『山からお宝 本を積まずにはいられない人のために』、けものみち文庫2、p p. 56-p p. 57、2008年、けものみち計画

[図書] (計1件)

- ① 金水敏・乾善彦・渋谷勝己(共編著)『日本語のインタフェース』シリーズ日本語史4、2008年7月、岩波書店、金水の担当はp p. 1-23、p p. 205-236

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

蜂矢 真郷 (HACHIYA MASATO)  
大阪大学・文学研究科・教授  
研究者番号：20156350

### (2) 研究分担者

金水 敏 (KINSUI SATOSHI)  
大阪大学・文学研究科・教授  
研究者番号：70153260

岡島 昭浩 (OKAJIMA AKIHIRO)  
大阪大学・文学研究科・准教授  
研究者番号：50194345

### (3) 連携研究者

なし

### (4) 研究協力者

鳩野 恵介 (HATONO KEISUKE)  
大阪大学・大学院文学研究科・博士後期課程・3年

藤本 真理子 (FUJIMOTO MARIKO)  
大阪大学・大学院文学研究科・博士後期課程・2年

清田 朗裕 (KIYOTA AKIHIRO)  
大阪大学・大学院文学研究科・博士後期課程・1年

竹村 明日香 (TAKEMURA ASUKA)  
大阪大学・大学院文学研究科・博士後期課程・1年

蜂矢 真弓 (HACHIYA MAYUMI)  
大阪大学・大学院文学研究科・科目等履修生